

talk! talk! talk! ミュージシャン・布袋寅泰さん



ミュージシャン

布袋寅泰さん

独自のロックロールを貫き、ファンを魅了し続けるミュージシャン・布袋寅泰さん。その圧倒的なパワーを持つ音楽は、世代、国境を超えて多くの人の熱い視線を浴びている。2002年元旦。そんな布袋さんの新しいプロジェクトとしてスタートした「hotei.com beat crazy」。このサイトでの布袋さんの新しい表現ツールとなったのがニコンのデジタルカメラ・D1Xである。「beat crazy」で彼が目指すものは一体何か？そして表現するうえでのこだわり、信念とはどんなものなのか？もはや音楽にとどまらず様々な分野で活躍する布袋さんに、クリエイターという視点でカメラについて語っていただいた。

プロフィール

ほてい・ともやす。1962年生まれ。1979年にロックバンドBOOWYを結成し、ギタリストとして活躍。発表するアルバム、シングルのセールス枚数やライブの動員数など、次々に驚異的な記録を打ちだし瞬く間にロックバンドNO.1の地位を確立した。1988年に解散。東京ドームにて行われた解散ライブ「LAST GIGS」では、11万人分のチケットが10分でソールド・アウト。チケット入手のために殺到した電話で都内電話回線がパンクしたという。

解散後はソロ活動を中心に作品を発表し続け、常に日本のロックシーンの第一線で活躍している。他アーティストへの作品提供も数多いほか、海外の様々なイベントにおいても日本を代表するギタリストとして一流ミュージシャンとの競演を果たすなど、国内外から熱い注目を集める。独特の存在感で映画やCM出演のラブコールも絶えない。2月6日にオリジナルシングルとしては約1年半ぶりの「RUSSIAN ROULETTE」、3月にはアルバム「SCORPIO RISING」をリリース予定。さらに5月からは全国ツアーもスタートするなど、2002年もパワー全開だ。2002年元旦に、布袋寅泰のオフィシャルファンサイトである「hotei.com」から、ファンと布袋寅泰の双方向のコミュニケーションを実現させるための会員制サイト「hotei.com beat crazy」がオープンした。クリエイティブな作品を発表しあう場としても新たな可能性を秘めたこのサイトでは、ニコンのD1Xを使って撮影した彼の作品も見ることができる。

クリエイティブを実現するサイト「hotei.com beat crazy」



2002年の元旦に布袋さんは会員制の新サイト「hotei.com beat crazy」を立ち上げられましたね。これは、どういったサイトなのでしょうか？

本体の僕のオフィシャルサイトである「hotei.com」は、オープンから2年半が経ち、このサイトを通じて、ファンの皆さんとの距離感もどんどん近くなりました。そこで、情報を発信するだけでなく、そろそろ本当の意味合いでの双方向性のサイトを立ち上げよう！と思ったことから誕生したのが「beat crazy」です。

コンピューターの普及により、WEBデザインを筆頭にグラフィックや音楽など、個人でもレベルの高い作品を創作できる時代になってきましたよね。この「beat crazy」では、僕も含めてこのサイトのメンバーになっていただいた方全員がそういったクリエイティブな

作品を発表できる場として解放したいと思っています。チケットの先行販売もありますし、今後はメンバー専用のイベントの開催なども考えています。コンテンツもこれからどんどん増えていきますが、メンバーの意見を最大限に取り入れ、一緒にこのサイトを育てていく、という発想で充実させていきたいですね。

「一緒に育てていく」という発想は二コイメージングと同じですね！具体的には、一般の方からのどのような作品を期待されていますか？

それこそまさにデジカメならではの醍醐味だと思うんですが、撮影した写真をアートの世界に広げていける若い才能みたいなものに会えたらうれしいですね。また、逆にプロのカメラマンの方にも、雑誌や展覧会だけでは表現できないものを、うちの「beat crazy」というシステムを使って発表してほしいです。

ウェブサイトの特性を活かすことで音楽と写真との密接な関係みたいなものも模索していけるんじゃないかな、という期待もしています。

では、布袋さんご自身は「beat crazy」でどんなものを表現していきたいと思っていますか？

意外と僕らの日常というのは、作品を通してしかみなさんにお見せすることがないんです。でも、写真というのは、優れたカメラマンの方々の作品を見ればわかるように、人間の心の中のを写しだしますよね。普段、肉眼で見ている現実の向こう側のようなもの、もしくは、その現実の手前側にある、自分の気持ちのようなもの。

だから、自分を表現する手段の一つとして、僕もこれまで音楽では表現できなかった新しい世界をデジタルカメラによって広げていきたいと思っています。また、カメラというツールと戯れることによって自分の違った部分が開花すれば、それは非常にうれしいですね。そういう今は自分自身でも未知な部分をどんどん表現していけたらいいな、と思います。

普段からデジタルカメラはお使いになっていたのでしょうか？

ええ。もともと僕はカメラはあまり手にする方ではなかったんです。従来のカメラだと、やっぱり現像までやってそこまで一つのプロセスという感じでしたよね。

でもデジタルカメラ時代が到来したときに「お、これは僕にもカメラを持てる時代がきたかな」と思いました。だからデジカメは、初期の本当にまだ画素数が粗いものから歴代何十台も持っています。でももっといいもの、もっといいものを、とだんだん欲が出てきて、ついここ（D1X）まで行き着いたな、と（笑）。使い始めたばかりで自信はまだないんですけど、とにかくクリエイトすることはなんでも好きですから、新しい遊びから始めてあととどこまで本気になるか、です。そうやって楽しみながら、「beat crazy」で僕の作品もこれからどんどん発表していきたいと思っています。

布袋さんも含めたメンバー全員の世界が新しく広がる、という意味でも限らない可能性を持ったサイトなのですね。

ええ。たくさんの方が自分の作品を発表しあうことで、音楽だけでなく総合芸術的な視野で語り合い、人間同士の絆も深まる。僕らが目指しているのはそんなサイトなんです。



撮影・布袋寅泰 使用機種・D1X

ギターとカメラの共通点とは？「ハートを通して作品を生み出すこと」

布袋さんにとって、魅力のある「ツール」とはどんなものですか？

僕に限らず大抵の男はカメラやギター、車やバイクといったツールに夢中になりますよね。どんなところに惹かれるのかというと、たとえば「重い」だとか、「プレーキが硬い」といった、自分でちょっとトライしないと動かないようなところがいいですね。手軽で小さくて、簡単というものではなくてね。そういうところは、男性と女性は少し感覚が違うのかもしれないね。でもギターにしてもカメラにしても、使わないとなんぼのものでもないですから、できるだけ愛情をこめて、たっぶり使っていきたいと思っています。それにあまりツールだ、ツールだと言って軽んじてはいけません。一つのツールには技術屋さん達のいるんなら努力だったり、インスピレーションみたいなものが詰まっているわけですから、それを使いこなさないと作っていらっしやる方にも失礼にあたりますからね。

「カメラ」と「ギター」。同じツールという意味では、なにか共通点はありますか？

うーん、僕はギターのことだったらいくらでも語ることがができますけど、カメラにはカメラのプロの方がいらっしやるから、あまり偉そうなことは言えないですね。でも、言えるとしたらやっぱり、そこに共通しているのはツールと人間との関係性でしようかね。

ツールと人間との関係性とは？

ギターって、こうして肩から下げて、（ギターを持つ構えをして）右手と左手を使って弾きますよね。これはすごく肉体的な行為でしょう。音はアンプから出てくるわけだけど、この右手と左手の間にはやっぱりハートがあるんですよ。このハートを通さないと、本当の音っていうのは出てこないと思うんです。

僕もアマチュアながら時々シャッターを押しますが、やっぱりカメラもこうして一度構えると（カメラを両手で持つしぐさをしながら）、ギターと同じように右手と左手の間のハートが写るんだろな、と思いますね。体、ハート、ツール。この関係性は、ギターもカメラも共通しているんじゃないでしょうか。

デジタルカメラと銀塩カメラの違いはどんなところにあると思われませんか？

僕はもう、アナログとかデジタルとかいう次元は過ぎたと思うんです。いろんなカメラマンの方と一緒に仕事をしますが、若い方だけでなく巨匠と呼ばれるような方もデジタルカメラを使っているし。

僕らの音楽の世界にも、昔はデジタル音楽とアナログ音楽を分けて考える時期もありました。でも、もうどちらも日常生活の中にあるものですから、これからはそれをいかに自分がコントロールしていくかが大切なんじゃないかな。やっぱり、ツールとは人間が作ったものだから、それ自体に人間がコントロールされるようではいけないでしょうね。軸になるべきものはやはり個人のスピリットの部分だと思えます。デジタルカメラは、今ものすごいスピードでどんどん新しいものが開発されていますけど、消費者もそれに流されていくだけではなくて、これからは一つのツールを十分に味わう喜びも大切にしないとね。

では、新しいツールとしてあえて「D1X」をお選びになった理由はどこにあるのでしょうか？

クリエイターにとって「クオリティー」という言葉って、絶対的なものだと思うんですよ。僕もギターというツールを、まあ言ってみれば道具を使っている人間として、それは日頃から強く感じていることです。もちろん機種を問わずいい音を出さなければいけないけれど、やっぱり優れたツールというものは、使い手に対しても語りかけてくるものがありますからね。

最高のツールを持っているんだから、そこから何を生み出すかというのは今度は自分の感性が問われるわけでしょう。そういう「自分を試す」という意味でも、クオリティーの高いツールというのは気持ちいいですね。今回、このハイクオリティーな「D1X」を選んだのは、そういうこだわりからきていたとも言えますね。



「撮る」「撮られる」。双方が同じ目的で挑むフォトセッション。「なんとも言えぬ爽快感と達成感があります」

布袋さんは、被写体としてもたくさんのカメラマンの方とセッションされていますね。ご自身はどのようなことを感じながら作品を作り上げていくのでしょうか？

フォトセッションはリズムが要です。カメラマンと同調していくような気分で心を寄せ合っていくんです。シャッター音1回1回から、カメラマンの心の中のいろいろなものを感じ取りながら僕もその絵の中に入っていきますね。

いい写真とは、被写体のその瞬間瞬間がいきいきしているもの。だから僕も、撮られることを思いきり楽しんでます。何を作るにしても緊張感よりもワクワク感が強くなければいけないと思います。ゼロから作り上げるわけですからね。

同じ「クリエイト」するでも、「撮る側」と「撮られる側」の違いはどんなところにあると思われませんか？

目的がはっきりしていれば、違いなんてないと思いますよ。日常のスナップ写真などは別ですけどね。

もちろん、カメラマンは光量やテクニカルな面でどんな瞬間もパーフェクトでいなければならないので、撮られる側よりはキツイと思いますけど（笑）。カメラマンによって撮影方法も異なりますが、優れたカメラマンというのは被写体をリラックスさせてくれるものです。お互いのハートが一つに溶け合っただけでセッションが成功したときには、なんとも言えぬ爽快感と達成感がありますね。

まさにカメラマンと被写体との共同作品なのですね。



フォトセッションでは、撮られることを思いきり楽しむという布袋さん

「自分を閉じてはいけない」視野を広げることで深みを増す音楽世界

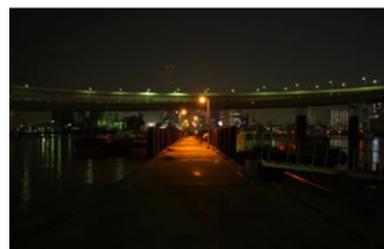
音楽、写真など、「クリエイト」にも様々な方法がありますが、その根底に共通しているものはどんなことだと思われませんか？

どんな分野においても、もともとあるものを動かすのではなくて、ゼロからモノを作ること「クリエイト」と呼ぶわけですね。だから、シャッター1枚押すにしてもギターの音を一音出すにしても、「これを伝えたい、これを表現したいんだ」という絶対的な自分の強い意志がないとそれを「クリエイト」とは呼べないと思います。

つつい撮れてしまったピンボケの写真がいい、と言われるパターンもあるけれども、どんなに周りの人に「いい」と言われても、自分が満足できなかったら自分の表現とは言えないでしょう。音楽の世界でも、「あのミストーンがよかった」なんて言われることもありますけど、僕にとってはやっぱりただのミストーンだったりしますから。重要なのはやっぱりハートですね。

最近の布袋さんは、映画出演やCM出演など、音楽にとどまらず様々な分野で活躍されていますが、布袋さんが「表現する」うえで、買われていることはどんなことでしょうか？

自分のクリエイティビティーを押さえつけてはいけない、ということです。人になんと言われようが、視野を広げることで、自分の音楽に必ず還元される



撮影・布袋寅泰 使用機種・D1X

るものだと信じています。人間は日々気持ちも変わりますし、考え方だって変わるもの。変化していくことは決して悪いことではないと思います。むしろ、変化を恐れずに新しい気持ちで何かに向かっていくことが大切なんじゃないかな。

世界は広いのです。自分を閉じてはいけません。あとは、快感原則に忠実に生きる、ということかな？

2002年がスタートしました。今年はどうな布袋さんを見せていただけるのでしょうか？

2月にはオリジナルとしては約1年半ぶりのシングルを、3月にはアルバムを発表します。5月からは大規模な全国ツアーも控えていますし、今まで以上にアクティブに、リスナーの皆さんとの距離をもっと縮めて爽快に走っていきたいと思います。

強き意志を持った音楽がどんどん減っていく中、ロックンロールの持つ圧倒的なパワーを伝えていきたいですね。期待しててください！ 自信あります。



2月6日に発売の新曲のジャケット写真。
パワーあふれるサウンドが伝わってくる1枚だ。

[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.